古民家の再生　新潟県産「古」材を今に活かす

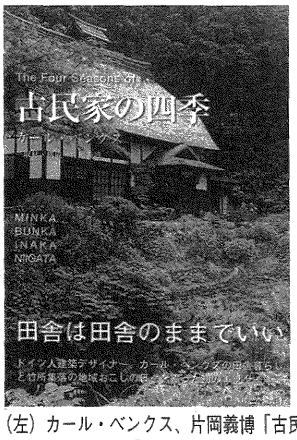
カール・ベンクスさんへのインタビュー

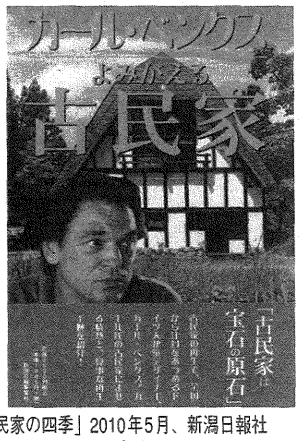
聞き手：**田口一博**
（新潟県自治研究センター研究員・新潟県立大学現代行政研究室）

はじめに

建築に対する規制や住宅への志向が変わったことが国産材への需要をなくし、森林を泣かせているという。しかし世界最古の木造建築が残る日本で、国産材を使い、現代の建築規制や志向に合わせた建築は不可能なのであろうか？　この問いの模範解答をつくっているのが、十日町市松代を拠点に活躍する建築デザイナー　カール・ベンクスさん。

ベンクスさんの仕事は、古民家の骨組みはそのままに、しかしそれ以外の部分はすべて現代の材料・資材・工法を使って新築する、というものです。したがって外観はその町並みに合わせたベンクス・スタイルを取りながら、一歩中に入ると築100年以上たった古民家の骨組みに圧倒されつつ、快適かつ効率的で高質な空間となっているのです。





（左）カール・ベンクス、片岡義博「古民家の四季」2010年5月、新潟日報社
（右）柚木崎寿久「よみがえる古民家」2004年6月、新潟日報社

ベンクスさんの古民家や建築に対する考え方は、既に書籍等でも紹介され、また新潟県内でもいくつもの建築実績を見ることができます。そこでここでは、新潟の森林の恵みを現代に生かすには、という観点からお願いしたインタビューで構成しました。
（2011年3月8日、十日町市竹所の事務所とご自宅「双鶴庵」・松代のカールベンクス・ハウスにて）

古くて新しい双鶴庵（ご自宅）

ー今の日本の住宅について、どう感じますか？

住宅が使い捨てにされるというのは、どうなのでしょうか。建てられてわずか20年ほど、まだ住宅ローンも残っているうちに壊されて建て替えられてしまいます。私の生まれたドイツでは、古い建物を勝手に壊すことはできない。許可を得なければならないのです。そもそも、まだ使える物を壊して捨ててしまうのは、もったいないではないですか。

ー第２次世界大戦前までの日本の住宅は、もっとずっと長持ちでした

そうです。住宅というものは、100年、200年と受け継いで使っていくものなのです。新潟県内にはそのように使われてきた民家が沢

山あります。私はドイツ、フランスで建築デザインの仕事をした後に日本に来ました。そして民家に大変な魅力を感じ、当初は日本の古民家をドイツに輸出する仕事をしていたのです。

ー古民家の輸出ですか！

各地を歩くと、立派な木材を使って建てられた民家が使われないまま放置されているのです。古民家はよい木材を選んで建てられているものです。今ではなかなか手に入らないような大きな木が使われています。当時は遠くまで運ぶことはできなかったでしょうから、近くで育っていたものを使ったのでしょう。そのような長い年月をかけて育ち、そして柱や梁として使われてきた木材は、これからもずっと使っていくことができるものなのですから。

ー日本ではかつて「住まいは夏を旨に」などと言われていたのですが。

冷房がなかった頃はそうだったのでしょう。しかし今では冷暖房もあれば照明もある。だから冬を主に考えてつくっていった方が快適。この部屋（双鶴庵1階）明るくて暖かいでしょう。床暖房なんですよ。

木製サッシで明るい窓

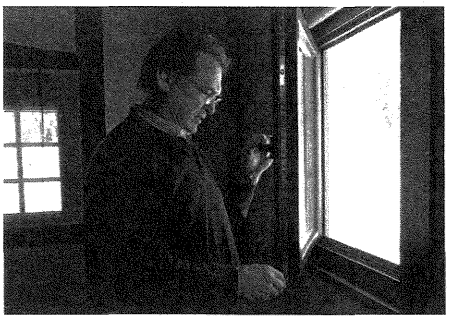
ー確かにポカポカです。でも、床暖房にするには専用の床材にしないといけないと聞いていたのですが。

そんなことはありません。ここで使っているのは節がいっぱい入った桧の板目板という安い材料です。この方が長く使うには安心です。合板は狂いが出ますし、接着剤を使っているから、廃棄するときにも化学成分が心配です。

ー今でも2メートル近く雪が積もっていますが、これほど窓を広く取っていても大丈夫なのですか。

昔の建て方では窓はほとんど取ることができませんでしたが、丈夫で気密性の高い木製サッシを使っているので、熱も逃がさずに明るい空間をつくることができるのです。古民家に行くと、窓はあっても冬は雪囲いで真っ暗でしょう？　木製のサッシを使えばアルミのように熱も逃げないから結露はないし、ガラスも二重で丈夫だから雨戸もいらずに明るいのです。

ー窓を背中にしても、全然寒さは感じません



ね。木のサッシは全然冷たくないし。

よく見て下さい（窓を開ける）。日本でも使われ始めたペアガラスとは厚みが違うのです。ガラスそのものも厚いですが、ガラスとガラスの間に桟が入っているから断熱効果も高いのです。そうやって丈夫につくられているから雨戸もいらないのですね。アルミサッシはアルミの部分から熱が逃げてしまうのです。木ならそんなことはありません。

古民家の古材を使うというのは、昔と同じ家を建てるのではありません。古民家では鴨居の高さは160センチくらいしかない。それでは私は（180センチ以上？）頭をぶつけてしまいますから、床の高さを下げて、私の身長に合わせてある。ほら、ここに古い敷居の跡があるでしょう。

ーすると、双鶴庵の骨格はかつての古民家だった頃のままなのですね。

その通りです。家の周りに除雪用の機械を入れるため、2メートルほど平行移動しましたが、骨格となる柱や梁はすべて昔のままです。100年以上臍で組み合わされていたのですから、そのままが一番よいのです。ただし、骨格も一旦すべて解体し、柱などが傷んでいたところは継いで直したりはしています。変えたところはこの窓をずっと大きくしたところぐらいですね。ここは梁の位置を変えています。

ー古い材木をただ再生利用するというのではなく、建物のこれまで使われて来た骨格ごと再生されているのですね。

これは私の父が家具職人だったことや、私が建築家としてではなく、修復からキャリアを開始したこととも関係しているのかもしれません。

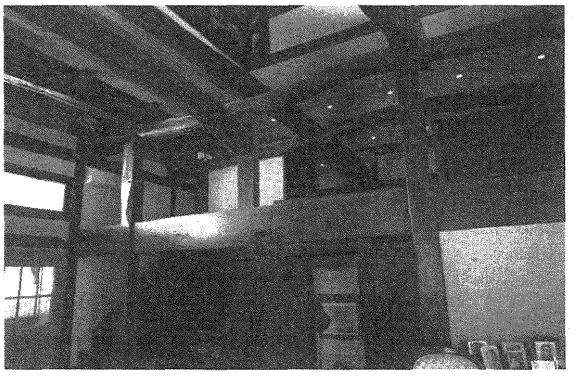
今は木材を機械で製材し、狂いのないまっすぐな材料として使います。しかしこの梁を見て下さい。木が生えていたときの形のままですよね。昔はそんなに遠くから木材を運ぶことはできませんでしたから、棟梁は建てようとする家の近くで「これ」といった木を探して伐り、乾燥させては製材しと、何年も時間をかけて一軒の家を建てていった筈です。だから木が生えていたころからの性格をよく見て使っているいるのです。だから骨格の柱や梁はそのまま生かすのが一番よいのです。

新潟県産材を使いこなす

ー新潟の斜面で育てられた杉は雪のために根元が曲がり、製材のときに使えないというのですが。

プレカットといって、工場で柱や梁として全て加工までする今は、まっすぐな木しか使えません。杉の根元が曲がった部分はとても固いので、その形をそのまま生かして梁に使えば丈夫でかつしなる、もってこいの材料にできるのです。昔の人はその形が鉄砲の握り部分に似ていることから「鉄砲梁」として曲

がった杉を使いこなしていたのです。今でも新潟の豪雪地帯で古民家を解体して天井を外すと、見事な鉄砲梁が出てくることがありますよ。



双鶴庵で一番好きなのはこのケヤキの柱。柔らかい色をしているでしょう。これまで100年以上ここで家族を見て来たのですが、こうして解体・改築して生まれ変わって、また100年以上、ここでこの家を支えてくれるでしょう。地域で育った木は、地域の環境に合っているから、こうして長持ちするのです。

ー防火や耐震といったことだけでなく、手作りがなくなって工場生産になったことが、新潟の木材が使われなくなった原因なのですね。

日本の戦後の戦災復興のために急速に建てられた住宅が、それまでの日本の住宅に対する考え方を変えてしまったのではないか。住宅とは100年も200年も使うもの。だから骨格はきちんとつくる。しかし内装や設備は時代によって変わってくるもの。ドイツでは日本のように20年で全部壊すようなことはありませんが、20年くらいで内装などは全部変えて、時代に合わせた使いやすく快適なものへと更新しているのです。確かに最初に建てるときは少し高いですが、そうした方が結局は安上がりで無駄にならない。家は間に合わせで作るものではないでしょう。

ー日本でもここ20年くらい、町並みとして建物を残していこうという動きが各地で行われるようになってきました。

建物の外観は変えてはいけない。しかし内部はその時代や用途に合わせて使いやすくしていなかければ住み続けていくことはできない。町並みとして残すために一番大事なのは、そこに快適に住み続けることができる、ということの筈です。

古い家のない町は、思い出のない人

ー同じである、ということは本質を維持しながら変わり続けていく、ということなのですね。

日本画家の東山魁夷伯は、私に「古い家のない町は、思い出のない人と同じです」という言葉をくれました。家というのは生活そのもの。その家をわずか20年で壊してどうするのですか。町にとっても、この場所にはこんな建物がある、ということが記憶されるから、たとえそこを離れてしまっても、懐かしさと

いうものが生まれてくるのです。

ーベンクスさんの作品を拝見してきましたが、レストランなりと、酒屋さんなり、現代風に使われているところでも、その用途にぴったりあった空間が出来上がっていますね。

私は注文を受けると、施主と話し合いをしてイメージをつくり、それに合わせて骨格に使う古民家を探すのです。だからただ民家を買い取ったり、解体された材木をストックしたりというようなことはしません。イメージにあった民家が見つかったら、今度は使われ方に合わせてどのように再生していくかを考えるのです。そして、最初に木を選び柱や梁にした大工たちと対話をしながら仕上げていくのです。彼らの技に感心することもしばしばです。

ー新潟市西蒲区角田浜にあるワイナリー、カーブ・ドッチのレストラン「薪小屋」は、内部が3層の大きな空間ですが、やはり柱や梁は元のものが生かされているようですね。

薪小屋の広大な空間（写真）は、もともとお寺だった建物を再生したのです。しかしレストランですからキッチンが一体でなければなりませんし、ビールの醸造やソーセージの製造施設も同じ建物に入っています。壁の内部に見えないように補強をして、もちろん耐火になっています。サッシはここと同じ木製のものを使い、開口も大きくとってありますから、ブドウ畑の向こうに角田山も見ることができます。

ー弥彦村の弥彦神社の前には、2軒の作品がすぐ近くにありますね。

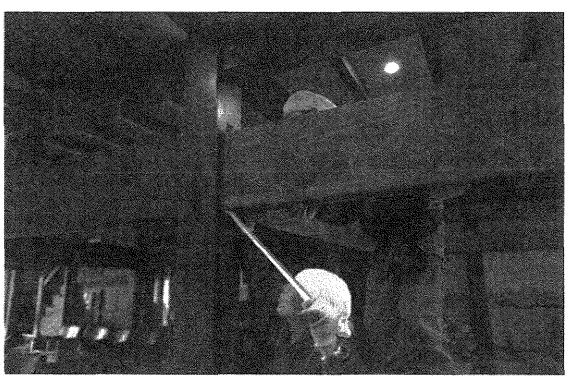
鳥居のすぐ前の「社彩庵ひらしお」（写真）と3軒先の「酒屋やよい」ですね。

社彩庵ひらしおでは修行された子どもさんが戻られるのと、道路の拡幅に合わせて建てかえをしなければならない、というオーダー。越後一の宮の弥彦神社の鳥居の正面にふさわしいものをと考えました。やや変形の土地ですが、150年前の木材は手作りの和菓子喫茶の

雰囲気に合っているはずです。酒屋やよいは、弥彦のまちづくり活動もしているご主人の意気込みと現代の酒店に必要な機能とを考えたもの。1階の売り場から天井までの高い吹き抜けを確保した上で2階部分にギャラリー空間を設けました。

大工の育成が重要

ー今、梁を直している方は？



古民家だけでなく、日本の建築全体の問題は家を建てられる技能をもった大工がいなくなってしまっていることです。工場のコンピューターで制御された旋盤のような機械で加工された柱を現場に持ち込んだら組み立てるだけ、というようなことでは、日本の伝統的な建築を守ることはできません。ドイツの職人も使いますが、日本でも住宅を手作りする技能を持つ者を育てていくことが何よりも重要です。だからカールベンクス・ハウスで仕事をしているのは社員の大工です。

ー今回、お話を伺っていて思ったのは、特集の企画は「新潟県産の木材をもっと使っていこう」というところから入ったのですが、結局それは地域で育まれてきた文化を大事にする、ということにつながってくることだとわかりました。

最近は野菜でも地場野菜ということが見直されています。それに合った地域の料理があるはずです。ドイツならチーズやビールですね。工業製品なら同じ規格のものを全国に流通させることが合理的かもしれませんが、住宅はまさに生活そのものですから、同じ既製品に合わせるのは変です。

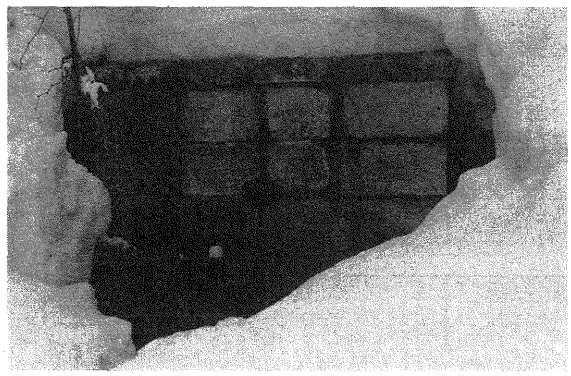
インタビューを終えて
～地元の木を使うこと～

古民家が沢山あるからとほとんど即決で松代町竹所（現十日町市）に移住したベンクスさん。1996年当時、地元の人は「日本人がいなくなる過疎なのに、ドイツ人が？」と思われたそうですが、今や竹所をもっと楽しいところにしたいという夢を一つ一つ形にしているところ。

地元で育った木を地元で使うのが一番。そして長い歳月をかけて育った木は、使い捨てにするものではなく、ずっと受け継いで使っていくべきもの、ということ。

身近にある当たり前のものは、なかなか大

事なものと感じることができないのですが、当たり前の持つ価値に気付くこと、そしてそれを大切にし、さらに発信していくことが、地域づくりなのであるということを考えさせられました。また、その活動が松代発、ということにも大きな意味＝他ではないユニークさがあると思いました。



最後の写真は双鶴庵の下にある竹所集落の水場「竹水」。ずっと前からあるように見えますが、2度の地震の後につくったそうです。このインタビューの後、3月12日未明の地震で十日町市は被災し、水道も被害を受け断水しましたが、竹水は竹所集落の命の水となって大活躍したそうです。

カール・ベンクスさん

1942年、東ベルリンの家具職人の家に生まれる。ドイツ・フランスでインテリアや建築の仕事をした後、日本の古民家にあこがれて十日町市（旧松代町）竹所に移住。（有）カールベンクスアンドアソシエイトを設立し、各地で古民家再生とその職人の養成にも取り組んでいる。

【参考文献】

カールベンクス　アンド　アソシエイト
ホームページ（http://www.k-bengs.com/）
2011年3月16日最終閲覧

落希一郎「僕がワイナリーをつくった理由」
2009年6月、ダイヤモンド社

（後記）今回の東日本大震災で古くから残されてきた古民家などが、大きな被害を受けた。土蔵の壁などは職人が不足して、すぐには復旧できないという。被害を受けた建物を壊してしまうことは簡単なのかもしれない。しかし、ベンクスさんが語ってくれたように、町の思い出を残すということが、今、一番必要な「復興」なのではないだろうか。